

## 献 辞

グローバル化の拡大、情報化のさらなる加速、他方で少子・高齢化の急激な進行など、21世紀日本社会を取り巻く環境は様々な新しい課題を私たちに突きつけています。そのなかで商学部は、2005年に「商学教育100年・商学部創設40年」を迎え、さらに2008年には「会計教育90年・会計学科設置40年」を迎えようとしています。歴史の大きな転換点のさなかにあつて、商学部はあらためて自らのミッションを確認し、そのことを教育・研究の「場」においていかに実現していくかが問われているように思われます。

この節目となる年に殿村晋一教授が古希を迎えられ、本学を定年退職されることとなりました。先生は1966年に助手として専修大学に入職されてから、41年の長きにわたって教育と研究に心血を注がれて同僚や学生たちに多大の影響を与えてこられました。

殿村晋一先生は秋田県にお生まれになりました。1961年に早稲田大学第一文学部史学科西洋史専攻を卒業されたのち、同大学大学院商学研究科経済史専攻に進学、66年に同研究科博士課程を修了されました。同課程修了後直ちに専修大学に助手として入職され、商学部創設間もない67年に講師に就任、79年に教授に昇格されて今日を迎えられました。

殿村先生は学部で商業史を、また大学院でも商業史特論および同特殊研究を担当されてきました。めまぐるしく転変する現実の経済事象をビジネスの視点で分析し、考察することを旨とする商学部教育のなかにあつて、先生は長い歴史的スパンで物事を考察する視点の重要性を情熱をもって教えてこられました。先行きの見えない時代であるからこそ、ますますそうした視点の重要性を感じます。

在職41年の間に殿村先生は学内の幾多の要職を歴任されました。1992年に二部学生部長をつとめられたのち、93年から97年まで商学部長に就任されました。98年から2000年まで体育部長、さらに06年4月からは人文科学研究所長をおつとめになって、退職間際まで専修大学の教育・研究の発展に尽力されています。先生が同僚から推されて各組織の長になられた大きな理由は、先生の温厚かつ「大陸的」でおおらかなお人柄にあったのではなからうかと拝察いたします。

殿村先生の研究領域は幅広く多岐にわたっていますが、そのなかで「明礬」を素材にして数度にわたってお書きになった論考は大変興味深いものがあります。織物の媒染剤として不可欠な「明礬」に焦点をあてて、中世地中海世界から毛織物工業で台頭する「新興工業国」イギリスへ、そして最後は日本にまで視野を広げて、明礬の生産やビジネスのあり方、それに携わる「企業家」の姿を考察されています。同じ商業史を担当する者として多くの示唆を与えられました。

以上のように、殿村晋一先生は商学部40年の歴史を身をもって支えてこられた方でもあります。「大学冬の時代」に直面して学部の真価が改めて問われる時代となりました。商学部は一丸となってこの厳しい時代を乗り切り、さらなる発展を目ざそうとしております。そうした私たちに対して、今までと変わらぬご叱正とご教示を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

2007年11月吉日

商学部長 川 村 晃 正